

129. ジャカルタの密集市街地「都市カンポン」に見る個人／集団による自己組織化に関する研究

- カンポン・アクアリウム居住者らが抱く「都市認識」へのアプローチを通して

Study on the self-organization by Individual /Collective in Urban Kampung, Jakarta, Indonesia

-Through approaching to Inhabitant's own Urban-ceptions in Kampung Aquarium

太田 裕通*・神吉 紀世子*

Hiroto Ota*, Kiyoko Kanki*

The purpose of this study is to grasp the mechanism of self-organization in urban kampung: Kampung Aquarium, Jakarta. The eviction in April 2016 caused 500+ families to lose their home in this Kampung. But due to a policy and leadership shift, the government has agreed to rebuild by community action planning. In order to understand “What is Kampung” and plan not only the physical environment but also the entire human environment with all of its tangible and intangible qualities, we made dialogue with inhabitants for approaching to their own Home sphere and Evaluating by an original way of sketch. As a result, we described their Home sphere of own surroundings and Evaluating from individual points of view, and autonomous orders which the community has shared in Kampung Aquarium.

Keywords: Jakarta, Urban Kampung, Self-organization, Urban-ception, Dialogue, Home Sphere

ジャカルタ, 都市カンポン, 自己組織化, 都市認識, ダイアログ, 自地域

1. 序

1-1. 問題の所在：ジャカルタの密集市街地に見る居住者による自己組織化のメカニズム

密集市街地の魅力的な生活空間を継承した住環境改善や物理的環境の改変に関して国内では数多く論じられてきた⁽¹⁾。東南アジアの大都市であるジャカルタでは急速に開発が進む一方で、今でも多くのカンポン⁽²⁾と呼ばれる密集市街地が存在する。岡部¹⁾はカンポンに「全体を把握せずして、部分から状況の変化に合わせて柔軟に対応して秩序をつくりあげていく自己組織化(岡部, 2011)」の潜在力を見出し、そのメカニズムを解明することが脱近代都市計画への可能性を開くと指摘している。

本研究の対象とするカンポン・アクアリウム(Kampung Aquarium以下K.A.と表記する)は2016年4月、州政府によって強制立ち退き・住宅撤去が行われ、その市街地の全てが一度失われている(詳細は2章)。その後、居住者復帰と再建の運びとなり、民間の専門集団⁽³⁾の支援も得ながら住民参加型で今まさに一から新しいカンポンを構築しようとしている。一般に都市カンポンを初め、密集市街地の研究は物理的環境を拠り所として居住者らの生活や生業を読み取るが⁽⁴⁾、再建へと向かうK.A.では異なるアプローチを採る事が出来る。即ち失われた住環境の記憶が鮮明で、

自ら周辺環境を作り始めている居住者がどのようにカンポンを捉えや価値付けるかに迫ることが出来る。ここで自己組織化は、最小単位であろう「個人」から徐々に共有空間や相互配慮をつくり出していると考えられる。そこで意思決定能力のある自治組織である「コミュニティ」とは異なる緩やかな「個人」たちの関係があると考えこれを「集団」と呼び、これを捉えることで説明できる自己組織化のメカニズムを知ることを目指す。

1-2. 研究の目的：個人／集団による自己組織化の解明

以上から、本研究の目的は、K.A.において「個人」によるカンポンの捉え方や価値付けからつくり出された「集団」での空間や秩序が見いだされるかを検証し、見いだされた場合それらが自己組織化の一種であるかを検証することである。時に来日経験のあるK.A.の「コミュニティ」代表者は、日本の市街地環境を指して「これは“カンポン”である」「これは“カンポン”ではない」と語ることがあった。その発言から「個人」に定義説明的ではないが「カンポン」をそれと判断できる捉え方があることが観察された。居住者が当たり前のように認識している「カンポン」の姿には丁寧にアプローチする必要がある。

1-3. 研究の方法：居住者毎の「都市認識」へとアプローチするダイアログ手法の導入

上記の目的の為、既に国内で開発されている「都市認識」へアプローチするダイアログ手法⁵⁾を導入することとした。太田は固定的な基準尺度の無い自地域(Home Sphere)⁵⁾およびその価値付け(Evaluating)を含む居住者毎の固有な都市・地域の見え方を「都市認識」と総称し、対話によって感受する⁶⁾方法を提案している。

居住者の思い描くものへのアプローチは、「都市のイメージ⁷⁾」を初めとした認知地図の研究が知られている。インドネシアにおいても過去に、密集市街地の住民に生活圏等

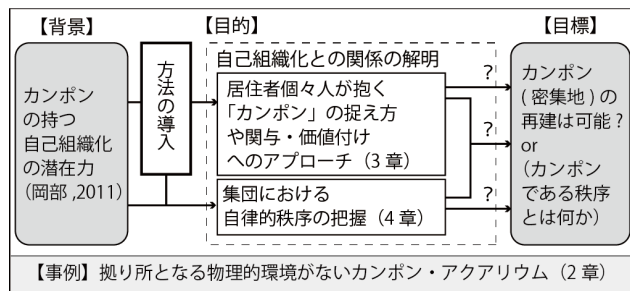


図1：研究課題の整理と論文構成

*正会員 京都大学大学院工学研究科建築学専攻 (Dept. of Architecture and Architectural Engineering, Kyoto University)

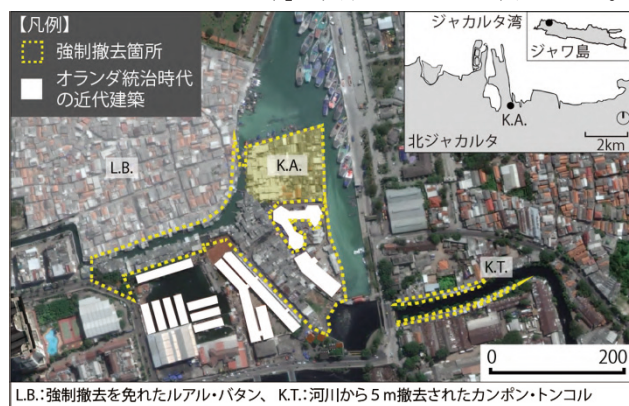
の認知地図を描かせる研究⁸⁾もある。ここでは旧市街地と開発された住宅地の双方で認知地図を描かせ、生活パターンと照らして重みのある環境エレメントやストリートの読み取りから市街地構造の把握や、住宅地の居住者による改変や住みこなしを明らかにしている。しかしカンボンの捉え方は、例えば生活圏や生活パターンと強く関連するとは限らない。多様な「個人」の価値付けや捉え方を前提とすると非構造的対話が適していると思われる。特にダイアログ手法は、独自のスケッチ法を通して事前に決めきれない概念(都市認識)へ居住者の関心や価値観に沿う形で徐々に接近する方法である。従って少なくとも本ケースにおいては実施の意義があると思われる為採用した。

2. K.A. の概要と自律再建に至るまでの経緯

先ず、2 章では、K.A.の概要及び強制撤去から自律再建に向かう経過及び撤去前後の集住環境を、現地で活動記録としてまとめられている文献²⁾と観察・聞き取りで得られた情報を基に把握する。

2-1. K.A. の概要と経緯の整理

K.A.は、ジャカルタ北部スダクラ港周辺に位置し、オランダ統治時代、東インド会社の海洋研究所があったことからアクアリウムの名がつく漁村であった。また周囲にはオランダ統治時代の近代建築も多く現存している(図2)。それらの近代建築を核とした州政府による観光地整備事業計画のため、2016年4月に約1ha・230軒710人の強制立ち退き・住宅撤去が行われた。しかし立ち退き計画を撤回し居住者復帰を掲げる新知事の就任(2017年4月)により急展開を見せ、K.A.の再建が始まった。以降 Rujak の支援の下、アーティスト主催のワークショップ⁽⁷⁾や日本の大学と共催したフィールドスクール⁽⁸⁾等積極的に外部を巻き込みつつ居住者主導の自律再建へと向かっている。表1はカンボンと「コミュニティ」に関する大まかな年表である。



2-2. 強制撤去以前の姿

大火や立ち退き計画等を経験しつつも2016年までは40年以上居住が続いている。インドネシアの住民組織単位⁽⁹⁾であるRTは2つ(RT001,RT012)あり、撤去前には約365世帯710人程が1haの中に居住する密集地であった(写真1)。人口の約7割が漁業や工場勤務などインフォーマルセ

表1: K.A. の経過年表 (文献2と聞き取りより作成)

年	出来事
1940-1960s	インドネシア国立科学院の海洋研究所が所在
1970	居住が始まり、RT001が形成される
1980s	住民が増加し、RTが二つになる
1996	ジャカルタ州行政によって撤去が計画されるが、住民の反発により実施されずに終わる
2009	RT001で火災が発生
2010	住民による再建が始まる
2011	RT012で火災が発生
2016.04	ジャカルタ州行政による強制撤去が実施 再建に向けたRujakによる協働が始まる
2017.04	ジャカルタ州行政が政権交代、新知事が就任
2018.03	仮設シェルター建設
2018.08	日本人アーティストによるワークショップ開催
2018.09	第一回 国際フィールドスクール開催

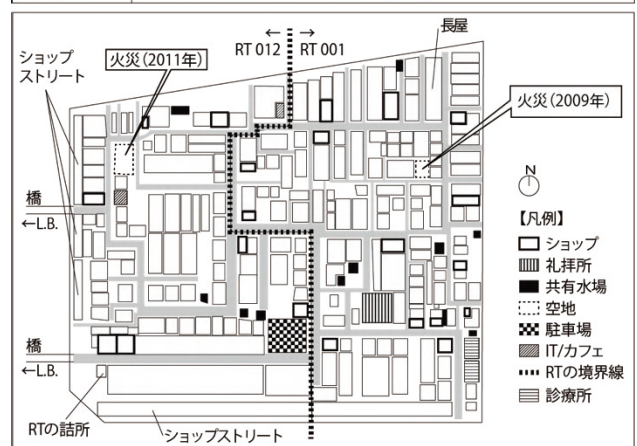


図3: 撤去前の再現図 (文献2と聞き取りより作成)

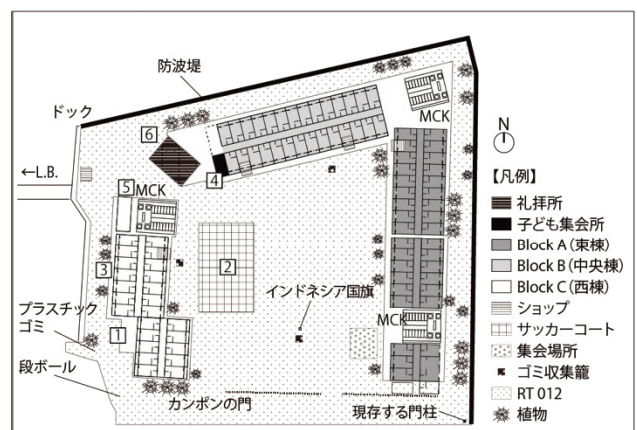


図4: シェルター図面 (文献2と観察より作成)



図5: シェルター現状の写真群 (撮影場所は図4に記載、筆者撮影)

クターに従事しており、居住者の多くが日雇い労働者であった²⁾。図3は撤去前の密集市街地平面の再現である。Rujakが居住者らと共にワークショップによって作り上げたものを基に作成した。東西で2つのRTがあり東側のRT001から先に居住が始まっている(表1参照)。ダイアログにおいて2度の火災が数人から話されたり、また単なる長屋ではなくショップストリートであったことが指摘されたりした部分は図3に追記している。

2-3. 強制撤去後の姿

立ち退き計画を撤回し居住者復帰を掲げる新知事の就任から約1年後、仮設のシェルターが建設される(2018年3月)。図4はその平面図である。図からわかるように3棟からなり(それぞれBlock A,B,C)、住戸は18平米程のものが90世帯分用意されている。図5は2018年9月及び11月頃のシェルターの様子を写したものである(撮影場所は図4と対応)。シェルターの周りにはそれぞれの居住者毎の暮らしがあふれ出している。またMCK⁽⁴⁰⁾が3箇所と礼拝堂、幼稚園も併設されている。これらの機能は行政が提示したプランに元々含まれていたものではなく、Rujakや居住者らによる調整の結果獲得されたものであることが聞き取りから分かった。さらに筆者らは2018年9月と11月に2度訪れているが、その間にも植物や鳥よけ、物干しといった生活道具が増加し、より住みこなしが進んでいた。標準化されたシェルターも彼らによって「カンボン」らしい環境へと自律的に変えていくことが分かる。

3. ダイアログ手法の実施と結果:「個人」の捉えるカンボン

3章では居住者とのダイアログの実施結果を報告する。

3-1. 手法の概要

本手法によるダイアログ(Dialogue)⁽⁴¹⁾では、居住者にとっても普段から意識することのない自地域やその価値付けを言語化するだけでなく、対話者(本研究ではアプローチャーと呼ぶ)が言葉になっていない意味内容も含めてスケッチによる外在化を試みる(図6)。描いて終わりではなく、居住者へ見せて確認する事を前提とし、了解し合えるまでスケッチを描く。対話のきっかけとして質問項目⁽⁴²⁾を準備するが、非構造で居住者の話したい内容を中心に対話を進める。スケッチ以外に地図を3種類、撤去前のカンボン再現(図3)、現状シェルター状況(図4)、周辺の広域地図を用意し、適宜メモを書き込める形式とした。実施協力者はスノーボールサンプリング形式でカンボン代表者やRT長の協力を得ながら募った。アプローチャーは筆者(a)と共同研究者(c)とインドネシア語と日本語の通訳者1名(b)の3名である。言語は基本的にインドネシア語で、序盤は

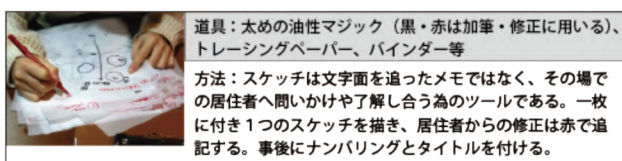


図6: ダイアログ手法におけるスケッチの描き方

道具: 太めの油性マジック(黒・赤は加筆・修正に用いる)、トレーシングペーパー、バインダー等
方法: スケッチは文字面を追ったメモではなく、その場で居住者へ問いかけや了解し合うためのツールである。一枚に付き1つのスケッチを描き、居住者からの修正は赤で追記する。事後にナンバリングとタイトルを付ける。

生業や家族構成、来住歴等簡単なインタビューから行い、徐々に「都市認識」へと迫った。通訳者との議論から、Area dimana yang dirasakan seperti rumah sendiri(自分の居場所や家として知覚される領域)と表現する事とした。以下簡略してADDSRSと表現する。対話音声は記録、3人が描いたスケッチや地図への書き込みは全てスキャンして保存した。

3-2. 実施概要

表2のように2018年11月21日から28日の間に9回のダイアログを実施し、12名の居住者と話をする事が出来た(写真3)。親子や近隣の近しい居住者らは同時に行っている。1回のダイアログは2時間程度で、スケッチは1回につき最も少ない者で9枚、多いもので19枚となった。表3はそのスケッチの一覧である。誰のダイアログで、誰が描いたものか、そしてタイトルと了解及び修正の有無、内容の質問項目との紐付等を記述した。

Informantによって話題や展開は様々ではないが、凡そInformantの基本情報(質問項目[0]~[2])、居住地の履歴(質問項目[3]~[5])を把握するところダイアログが始まり、結果全てのダイアログにおいて居住者の自地域を描くことが出来た(質問項目[10]に該当)。またその理由となるような価値付けや各々の原風景等をスケッチによって了解し合うことができた(質問項目[6]~[11])。その概要を再編集したものが表4である。自地域に関しては地図に直接書き込んだものを補足しながら記述した(写真4,5,6)。ここで自地域は必ずしもその対話時の物理的環境や地理的広がりに限定されない為、撤去される前のカンボンの密集度合いの分かる屋根伏せを重ねて表記した。

表2: ダイアログ実施情報一覧

Informant	実施日程	年齢	性	Block	生業など
1 A	2018.11/21	30's	f	C	主婦
2 B,C	2018.11/22	40's,40's	f,m	C,C	売店員,売店オーナー
3 D	2018.11/22	40's	f	A	主婦
4 E	2018.11/23	30's	m	C	漁師
5 F	2018.11/23	30's	f	C	主婦
6 G	2018.11/23	30's	m	C	仕立て屋,RT長
7 H,I	2018.11/24	60's,30's	f,f	A,A	主婦
8 J,K	2018.11/25	40's,40's	f,f	B,B	アクアリウムショップ,主婦
9 L	2018.11/25	30's	f	C	主婦



写真3: ダイアログの様子(H,I)



写真4: 広域地図への書き込み例(A)



写真5: 撤去前図への書き込み例(A)



写真6: シェルター図への書き込み例(A)

表3: スケッチ一覧

Info.	App.	Title (筆者による日本語意識)	了	改	質問項目	Info.	App.	Title (筆者による日本語意識)	了	改	質問項目
A	a	①sea-side living (海沿いの暮らし)	○		[0][3]	F	a	④Well-being (家の中と外: 理想の家)	○		[7][12]
A	a	②Gathering Place (人が集まる場所・家)	○		[3][6][8]	F	b	①Fさん(来住歴)	○		[0]
A	a	③HOME-AREA (自地域)	○	○	[3][10]	F	b	②井戸端会議のファニーチャー	○		[6]
A	a	④Small Scale (狭いスケールが良かった)	○	○	[7]	F	b	③Shop + House (店舗付き住居)	○	○	
A	a	⑤Next one? (理想の計画)	○		[12]	F	b	④narrow alley 1.5m-2m ほしい (細街路)	○	○	[7][12]
A	b	①moving progress time line (居住場所履歴)	○		[3][4][5]	F	b	⑤house extension for new comers (新参者への寛容さ)	○		[6]
A	b	②History of User (ライフストーリー)	○		[0]	F	b	⑥water source for independent housing (水タンク必要)	○		[12]
A	b	③Costall wall-use <before/after> (堤防の使い方)	○		[7]	F	c	①house changing (居住場所履歴)	○		[3][4][5]
A	b	④Sea-side House (海沿いの家の構成)	○		[7]	F	c	②they share walls (長屋的に壁を共有)	○	○	[3]
A	b	⑤Alley Story (狭い道の涼しさ)	○		[7]	F	c	③chat in front of shop (ドアを開放的に)	○		[6]
A	b	⑥before shop house system (撤去前の店舗住居)	○		[7]	F	c	④pilot is good (1階に住みたい)	○	○	[12]
A	b	⑦FUTURE-IDEAL HOUSE (理想の家)	○	○	[12]	F	c	⑤she wants to see tourist on ship (クルーズ客を見たい)	○	○	[6]
A	c	①C block Fisherman (漁師多いCブロック)			[0][3]	F	c	⑥2F→1F (1階に住みたい)	○	○	[3][7]
A	c	②A's house history (来住歴)	○		[2]	F	c	⑦the best wide of roads (ベストな道幅)	○	○	[7]
A	c	③meeting@kampung Luar Batang (井戸端会議)	○		[6][8]	F	c	⑧the best thing is toilet (家にトイレ欲しい)	○		[12]
A	c	④children play @K.A. (子どもの遊び場)	○	○	[7]	F	c	⑨about water sink (家に水シンク欲しい)	○	○	[12]
A	c	⑤narrow street (狭い道がよかった)	○		[7]	G	a	①shop-house (店舗付き住居の構造)	○		[3][7]
A	c	⑥a space in front of house (家の前の空間)	○		[12]	G	a	②sunset-live (サンセットライブの思い出)	○		[6]
B	a	①Crusing (観光客向けのクルージング)	○		[6]	G	b	①Front's Netherland building (火事後の家)	○		[6]
B	a	②work at shop K.A. (主婦→お店の手伝い)			[0]	G	b	②young life emotion の思い出 (原風景)	○		[6]
B,C	a	③Self build House (撤去直後の自力住まい)	○	○	[3][4][5]	G	c	①why he chose block (現在の住戸のいい所)	○		[5]
B,C	a	④Today Home Area (自地域)	○	○	[10]	G	c	②the history of Netherland building (オランダ建築)	○		[3][7]
B	a	⑤Ideal Situation (理想の家の条件)	○	○	[10][12]	G	c	③mucholla (嘗ての礼拝堂の様子)	○	○	[7]
B	a	⑥ideal situation-section (理想の家の構成)	○		[12]	G	c	④home area (自地域)	○		[10]
B,C	b	①neighbor's before & after eviction (居住場所履歴)	○	○	[3][4]	G	c	⑤house & warung (一階に住み別店舗欲しい)	○	○	[7][12]
B	b	②section of housing system (家の構成)	○			H,I	a	①family and house (家族構成と嘗ての家)	○	○	[0]
B,C	b	③B&C house (家族構成)			[0]	H,I	a	②Re-use Material (素材の再利用)	○		[4]
B	b	④Governor's shops arrangement (食料品売り場)	○	○		H	a	③go to see with husband (海へ遊びに)	○		[6]
B	b	⑤Scenery before & after (海を見る生活)	○	○	[7][9]	H	a	④Frontier of K.A. (K.A. 初の居住者である H)	○		[1][6]
B	b	⑥before Eviction's 家前の集合エリア	○	○	[6][7][8]	H	a	⑤Beringing (お化けのようだったプリンゼン)	○	○	[6]
B	c	①meeting from several parts (居住場所履歴)	○		[9]	H,I	a	⑥Happy new year Fes. (新年祭の思い出)	○	○	[6]
B	c	②prefer to live 1st floor (1階に住みたい)	○	○	[12]	H	b	①before eviction sea-wall-being in tree (海沿い)	○		[6]
B	c	③they are one like brothers (仲間達)	○		[10]	H,I	b	②New year Festival atmosphere (新年祭)	○	○	[6]
B	c	④there was a meeting space at parking area (井戸端会議)	○	○	[6][7][8]	H,I	b	③before eviction house (撤去前の家の構成)	○		[3][7]
B	c	⑤roads are like labyrinth (迷路みたいだった)	○		[7]	H,I	c	①how to create a shelter (素材の再利用)	○	○	[4]
D	a	①Kitchen fo All (カンボン皆の台所)	○		[6]	H,I	c	②narrow streets (狭い道)	○		[7]
D	a	②ideal house (理想の家)	○		[12]	H,I	c	③reuse a Netherland building (レンガ屋根)	○	○	
D	a	③Home area image (自地域)	○	○	[10]	H,I	c	④a way between K.A. & L.B. (橋)	○		
D	a	④Same member through eviction (近所仲間)	○		[3][4][5]	H,I	c	⑤New Year's Day @K.A. (新年祭音楽と光)	○		[6]
D	b	①before shelter after eviction house' place Grid based placing (同じ場所)	○	○	[3][4][5]	H,I	c	⑥future planning (1階に住みたい)	○	○	[12]
D	b	②Dさんにとって IDEAL home area (理想の家)	○		[12]	J,K	a	①from when (バックグラウンド)	○		[0]
D	c	①house before now (来住経緯)	○		[2][3]	J,K	a	②like to live (北部に住みたい)	○		[5][12]
D	c	②parts she lived (居住場所の履歴)	○		[3][4][5]	J	a	③view from 3F-building (お店の良かった所)	○		[7][12]
D	c	③relationships between neighborfood (近所の空間性)	○		[7]	J,K	a	④lucky (風が気持ちいい)	○	○	
D	c	④the best scenery (子どもが海に飛び込む)	○	○	[6]	K	a	⑤Kitchen for workers(neighborhood) (料理を振舞う)	○		[6][12]
D	c	⑤the way to Kampung L.A. (L.A. までの通り道)	○		[9]	J,K	b	①before eviction's history (来住歴)	○		[0]
D	c	⑥floor 1 or 2 (1階に住みたい)	○	○	[12]	J	b	②J 前の家	○		[5][7]
D	c	⑦about narrow streets (広い道危ない)	○		[7]	J	b	③売ってる魚	○		
E	a	①Moving Living (居住場所履歴)	○	○	[3][4][5]	K	b	④shop's location of house (火事後の様子)	○		[6]
E	a	②family info (家族構成)	○	○	[0]	J,K	b	⑤Home area (自地域)	○		[10]
E	a	③Layangan (風揚げの思い出)	○		[6]	J,K	b	⑥ほしい atmosphere (ココナッツと休憩所)	○		[7][12]
E	a	④6000 km from K.A. (漁業の領域)	○	○	[9]	J	c	①from Muara Baru to K.A. (来住の経緯)	○		[1][2]
E	a	⑤Running Sea-side (海沿いをランニング)	○		[7]	J,K	c	②before & after eviction (居住場所履歴)	○		[3][4]
E	a	⑥Home area (自地域)	○		[10]	J,K	c	③they prefer to feel wind (風が気持ちいい)	○	○	[5]
E	a	⑦Level (地面の嵩上げの必要性)	○	○	[12]	J,K	c	④the north side is cooler (北側涼しい)	○		
E	a	⑧Strong istri (女性が強い)	○	○		J	c	⑤J's stores (お店の基本情報)	○		
E	a	⑨Dormaga (船着場を整備して欲しい)	○	○		J,K	c	⑥street meeting (シェルターの通)	○		[9]
E	a	⑩Shops of material (材料の調達先)	○		[9]	J,K	c	⑦about kakilima (屋台が多いと通れない)	○	○	[6][7]
E	b	①sea wall's construction (新しい橋の構造)	○			J,K	c	⑧sea wall prevents wind (堤防は半分が良い)	○		[12]
E	b	②house's floor (地面の嵩上げ)	○	○	[12]	L	a	①from when / where (家族構成)	○		[0]
E	b	③sea level ship's port reason (船着場)	○			L	a	②Home area (自地域)	○		[10]
E	b	④engine & ship's material shopping location (材料の調達先)	○		[9]	L	a	③sea wall is good? (堤防はゴミ捨て防止によい)	○	○	
E	c	①Living change (撤去後の船上生活)	○		[4]	L	a	④children is most important! (子どもが一番大事!)	○		[6]
E	c	②greeting married with a woman @L.B. (結婚)	○		[0]	L	b	①Lさんの家	○	○	[1][2][3]
E	c	③the scenery of a way from the sea (海沿いのロマンス)	○			L	b	②好きな雰囲気	○		[6][7]
E	c	④running near the sea (海沿いをランニング)	○	○	[6]	L	c	①moving to the K.A. because of marriage (結婚経緯)	○		[2]
E	c	⑤flood from L.B. (洪水の心配)	○			L	c	②her home area (海沿いの思い出)	○	○	[6][7]
E	c	⑥narrow streets (バイクが通れる道が良い)	○	○	[7]	L	c	③the second kinder garden (子どもの居場所)	○		[6][7][12]
F	a	①laundry for neighborfood (シェア洗濯機)	○		[6]	L	c	④she likes to live on the 2nd floor (2階が良い)	○		[12]
F	a	②Open space (家の前を開放する)	○		[12]	L	c	⑤mothers soccer (ママさんサッカーがしたい)	○		[12]
F	a	③Home Area (自地域)	○		[10]						

【凡例】 Info.: Informant の記号, App.: アプローチの記号,

Title: 通し番号とアプローチが付けたスケッチのタイトル, 了: 了解の有無, 改: 修正の有無, 質問項目: 注釈 10 の項目番号との対応, ▽: 各住戸内に水周りが必要という意見, ▼: 低層部に住みたいという意見, ■: 海沿いの暮らしにまつわる話, □: 密集市街地の空間性の評価

表4：自地域と価値付けの記述

1 : Informant A	2 : Informant B,C	3 : Informant D
父親が漁師であるAは、隣のカンボンであるL.B.に30年前に住み始め小学校をあげる頃にK.A.へ移住した。橋付 近の海沿いに住んでおり、人々が多く行きかう様子を思い出として語った。自地域は川を挟んだ二つのカンボンに跨ると言い、撤去前の狭くて涼しい密集地の環境、家の前の井戸端会議、海に向かって開かれていた暮らしを価値付けた。 A-a-②	撤去後、橋近くでジョップをしているCとその手伝いをしてるBは共に撤去前はK.A.の北西部に住んでいた。現在はBlockCに住んでいる。2人共自地域はK.A.の西側であると言う。Bは以前は海から帰ってくる漁師の旦那を2階から眺めていた風景や、火事でできた空気を集会所としていた風景を価値付けた。理想の家は一階でお店兼住居、二階はレンタルし、海が見える暮らしをしたいという。 B-a-⑤	自身のキッチンが、撤去前後を通じてK.A.の台所だったというDは、撤去騒動によって北東部から中央部、そして南東部へと移動した。自地域は外部にあるキッチンを中心とした家の周りと軒下からジョップのあるL.B.までと語る。また以前の密集地が故の近隣と近い距離や関係性、子供が海に飛び込んだり小さな魚市場の風景などを価値付けた。新しい家にもキッチンを外部的に使用したいと語った。 D-a-①
4 : Informant E	5 : Informant F	6 : Informant G
漁師のEは橋付近の家の撤去後船上生活を送っていた。現在はBlockCに住んでいる。自地域には家の周りやサッカーコートだけでなく、6000 km程離れた海の上も含まれると語った。かつて堤防が無かった頃、海沿いをランニングしていた思い出を語った。L.B.出身の妻と出会ったきっかけであり、海沿いのロマンスだと言う。またかつての密集市街地におけるバイクが通れる程の道幅を価値付けた。 E-a-⑥	自身の住戸で小さい商店をしているFは、常にドアを開放し近隣の小さな集会所のようにしている。そのような開放性に価値を置く。かつての密集地の通り幅は1.5-2.0m程が環境的に丁度良かったと語り、K.A.に近づく観光客がクルージングに乗っていくが好きだと語った。自地域は撤去前から大体同じエリアになるBlockC境界であり、Gerobak (台車)の上に座って語らう嘗ての風景を価値付けた。 F-c-③	服屋であり現RT長であるGは撤去前はジョップハウス、後は自分でシェルトーを作り今はBlockCに住む。自地域は特に大事な場所は集会所やL.B.の友達宅、撤去直後にお世話になったミュージックスタジオ等のネットワークであると語った。今後は住居とは別に店舗が欲しいと語る。また海に日が沈むのを背景に橋の上でギターを弾いていた20代の様子を原風景として価値付けている。 G-b-②
7 : Informant H,I	8 : Informant J,K	9 : Informant L
HはK.A.最初の居住者であり、研究所以外緑で覆われていた原風景、海沿いにそびえていたBeringingがお化けのようで怖かった事等を語った。またH,Iは海辺に船が集まり、音楽が鳴り花火が上がる新年祭が一番楽しかった思い出であると語った。H,Iの自地域は住み続けた海沿いの北東部で、今でも漁師であるHの旦那に連れられ船に乗って遠くまで遊びに行くという。 H,I-b-②	以前は観賞魚店を3Fで営んでいたJは新しく家を買ったばかりで撤去されてしまった。今でも夫はMuarabaruでお店をしており、またK.A.で海の見えるお店を再開したいと考えている。主婦であるKは港で働く人々へ料理を作っている。2人とも自地域はBlockBの住戸周辺で、水辺で風が気持ちよく、涼しい環境であるから今後もこの辺りに住みたいという。 J-a-③	Lは元漁師の旦那と結婚を期にK.A.へ移住し撤去前は北東部に住んでいた。現在も東側のBlockAに住んでいる。カンボンの子ども達が一番大事だと語るL宅は常に扉が開いており、撤去前から子ども達の遊び場であった。現在もオープンスペース(幼稚園)と同程度の子ども達が集まると言う。自地域は以前は北東部のみであったが、撤去後はK.A.全域になったと語った。 L-c-③

【凡例】 ■：自地域の範囲、■：シェルトーでの住戸

※スケッチ例の記号は表3と対応 (Info-App-Titleの順)

3-3. 居住者「個人」が捉える自地域の範囲と成り立ち

表4を見ると、ADDSSRSと言って得られた自地域は、RTやカンポンの範囲に寄らず、生業や来住歴あるいは個人的な趣味思考によって多様であることがわかる。その為何度かやり取りを経て自地域へと接近した。例えば Informant A の場合は、隣のカンポンであるルアル・バタン(L.B.)出身であるところから対話が始まった。また親が漁師である為橋の近くに家を構えていて、船も有していたという。現在のシェルターでも同じような場所の住戸に住んでいることから家と船と橋辺りが自地域かと問いかけた。しかしL.B.にもよく行き来することからL.B.も含まれるといい、また魚市場があったオランダ統治時代の歴史的建物が見通せることへの価値付け等も語った。以上から自地域はK.A.におさまらない領域(表4-1)として捉えられていることが了解された。他の Informant の自地域も同じように徐々に了解していくことができた。

また完全に個人毎にバラバラではなかった事例も得られた。Informant H と I は親子であり、自地域は同じ範囲を捉えているという。さらにBとC、JとKは撤去前から近隣で仲の良いグループの一員であり、自地域は同じような範囲を指していた。彼らはダイアログへも一緒に参加したグループであり、撤去前からご近所同士の関係性であった。自地域は同じ一方で、料理をしたいK(K-a-⑤)と鑑賞魚店をしたいJ(J-a-③)のようにその中での関わり方は異なる場合も見られた。

以上から、表4のようにダイアログ手法を用いて修正をしつつも居住者が捉える自地域とその成り立ちを描くことが出来て、それらは個性的で多様性があることが分かった。

3-4. 「個人」の自地域内における空間的関与

それぞれの自地域にはその理由となるようなストーリーや生業、営みがある。自地域内で自身がカンポンに対してどのように関わりを持つかが語られるケースが少なくない。ここからはまず、具体的な居住者毎の価値付け(表3の質問項目[6][7]に該当)が実際の空間への現れや関与として確認出来るもの(図7)を考察する。

Dは自分のキッチンを経営するみんなの台所として捉えており、キッチンを通したカンポンとの関わりに価値を置いている(D-a-①)。一方図7-1を見るとそのキッチンは他の住戸の前にも見られるようなよく見られる調理場である⁽¹³⁾。しかし、K.A.の居住者にとっては異なるように見えているだろう。漁師であるEは自地域の中に撤去後のオープンスペースで毎日行われるサッカーを含めた(E-a-⑥)。夜に漁に出て朝帰り、休憩を挟んだ頃ちょうど日が暮れて涼しくなってきた子供達とサッカーができる(図7-2)。K.A.の時間感覚を捉えることが出来る。Gは自身の原風景を目が沈む頃橋の上でのギター演奏(G-b-②)と語った。この価値付けは本人によって自覚的に表現された。アーティストが主催した「夢の家」コンテスト⁽¹⁴⁾で彼は、今はなき橋を作り、原風景を表現してみせた(図7-3)。Lはカンポンの子供達こそ大事だと語り、自身の家を第2の幼稚園とし



図7: 現在のシェルターにおける使われ方の写真群(筆者撮影)

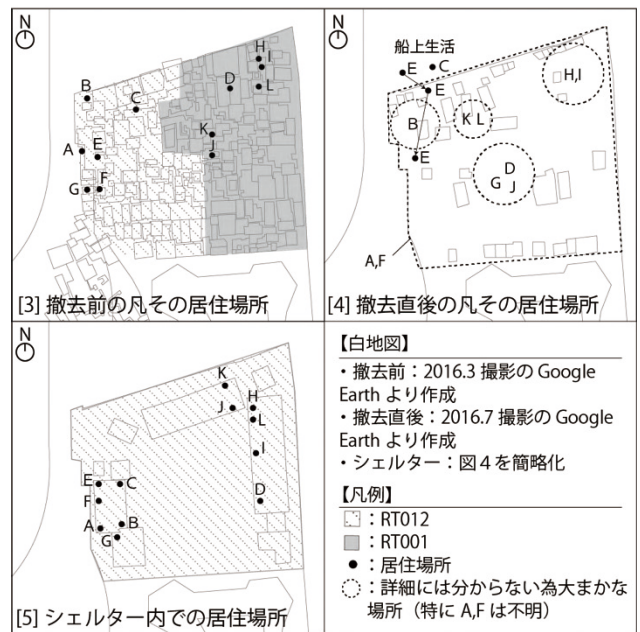


図8: 居住場所履歴のまとめ

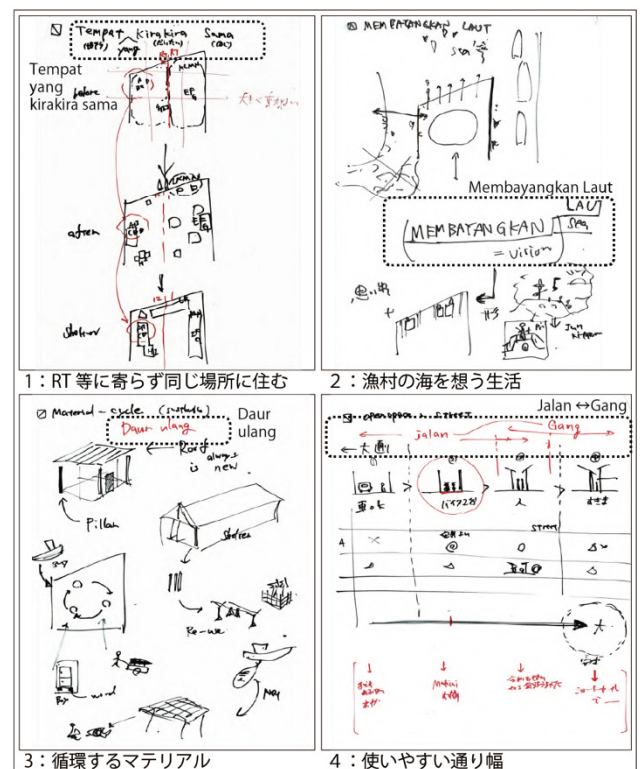


図9: フィードバック時に用いたスケッチ(点線枠は小見出しの引用部分)

て捉えている (L-c-③)。実際にL宅は扉が開いており子供が入りやすくなっているが (図7-4)、カンポンでは扉が常時開いているのは不思議ではない。しかし子供たちにとってのL宅の存在は違って見えているだろう。Lは新しい住居に移ってもその機能は続けたいと語った。また写真は無いが、Fは小さなショップを持つ住居の扉をオープンにしている事を価値付けており (F-c-③)、これも実際に確認している。同じ扉を開ける関与でもLとはまた違う意味で捉えられているだろう。これらは実際の空間から筆者らが確認出来たものであるが、確認出来なかったものでも居住者にとっては同様のリアリティを有して語られていると思われる。AがL.B.へ通い続ける事 (A-a-③) や井戸端会議を続けること (A-c-③)、Bが嘗ての空き地でやっていたような集会をしたいこと (B-b-⑥)、H,Iが今でも堤防を越えて海に遊びに行くこと (H-a-③)、Jがアクアリウムショップをしたいこと (J-a-③)等は、その例であり全ての居住者から何らかの空間的関与が語られた。

以上の事例に見られる実際の空間 (図7) はどれも物理的環境それ自体からは特性が捉え難いものである。しかしダイアログによって「個人」の捉え方や価値付けに基づく自地域内における空間的関与の結果である事がわかった。

4. 「集団」における自律的秩序の把握

9回のダイアログ後に、アプローチャー3名で居住者同士の共通性やK.A.という「コミュニティ」が持つ「カンポン」の秩序はどう解釈できるか等ディスカッションした。その結果は図9のようにスケッチでまとめた。

その後K.A.代表者によってA,D,G,K,Lを始めダイアログに参加していない居住者も含めた22名が集まりミーティングが開催された⁽⁴⁵⁾。その場でダイアログの概要をはじめ図9の内容を報告し、ディスカッションとフィードバックを得ることが出来た (写真7,8)。本章では少なくともここで集まった「集団」の中で共有されている秩序や空間に関して考察する。



写真7: ディスカッションの様子

写真8: ミーティングの集合写真

4-1. RTや物理的環境が変わっても不変な Tempat Nyaman

まず、全員の撤去前後の居住場所歴 (質問項目[3]~[5])を追っていくと、図8のようになる。撤去後のRTの変化等にも関わらずおよそ同じ場所であり、またご近所さん同士が離れないようになっていくことが分かった。RTよりもさらに小さいこのような人と場所のまとまりを、フィードバックにおいて Tempat Nyaman (心地のよい場所: 以下TN)と名付ける事とした。3-3において共通する自地域を持つグループはこれに該当すると思われる。一方広域の自地域を抱く者の中でも特に住居に近い安心できる部分である。

フィードバック時、「コミュニティ」代表者は「TNのよ

うな感覚はあって、同じ場所に住むことにこだわりがある、それが自分たちのヒストリーである。さらに今後再建が進んだ後、RTは2つになるのか分からないが、それでもTNは変わらず同じ場所だろう (Approacher-b 訳)」と語った。一般にRTは隣組とされるが、よりTNは小さな向こう三軒両隣程度のまとまりであり、人間関係と位置座標的な場所を含めた存在として捉えることが出来る。実際に視認することは難しいがカンポン居住者ら、少なくともこの「集団」においては見えており、物理的側面が失われても住み手が要する限り存続する秩序であると考えられる。

4-2. 「集団」で共有されている空間的な秩序

ダイアログでは、やはりこれから再建される予定となっている住環境への意見や要望も多く語られた (質問項目[12]に該当)。共通していたのは、各住戸に水回り (バス・トイレ)を設置することや (表3の▽に対応)、低層部に住んで屋外スペースも生活において活用したい (表3の▼に対応) というものである。しかしそうした住宅供給における最低限の条件以外にも、今後の再建に向けて活用できそうな、K.A.内で醸成され共有されている空間性もフィードバックで確認できた (以下①~③)。尚、小見出しは図9のスケッチからつけている。

①海を想う生活: Membayangkan Laut

元々漁村であるK.A.の居住者にとって海は生活の中心にくるものである。撤去前は海沿いの家屋の扉は海側を向いていたこと (A-b-④)や漁師の帰りを待つ風景 (B-b-⑤)等多くの者から海に纏わる話が語られた (表3の■)。特に漁師や海側に居住する者は多いのが表3からも分かる。ここには海側への方向性 (図9-2)が存在しており、新しい住宅地でも海を感じる暮らしがしたい、堤防は現在の半分位の高さに下げて欲しい等がフィードバックで語られた。単に物理的に開けているだけでなく隣のL.B.との行き来によって生まれる河口部でのロマンス (E-c-③)や情緒豊かな橋の上での風景 (G-b-②)等の物語にも重きが置かれているようであった。

②循環するマテリアル: Daur ulang

一般にカンポンではセルフビルドが多いが⁽³⁾、材料はどこから来るのか。K.A.では基本的に材料を購入することはないという。例えば、H,Iは強制撤去直後の自力でシェルターを作ったが、元の家柱等使えるものは再利用したという (H,I-a-②)。実際に拾ってきたものや梱包で余った材料を巧く利用している様子は多く確認された (図7-5,6)。カンポン内で材を見つけてくる事が基本であり、自前で用意する態度が現れている (図9-3)。

一見するとゴミが投棄されているようにも見えるカンポン内の状況も、誰かが活用する為に置かれている素材であり、それは無秩序ではない事が語られた。

③使いやすい通り幅: Jalan ↔ Gang

密集市街地の小さなスケールに価値を置く話しも多く得られた (表3-□)。整理をすると通りの幅にも4パターンあるということが了解された (図9-4)。道とは言えないような家と家の間に偶然出来た隙間 (Gang)、人が通れる幅の通り (Gang/Jalan)、バイクが通れる幅の通り (Jalan)、車が

通れる幅程の大通り (Jalan) である。狭いと空気が悪く、広いと暑い、バイクが通れるくらいがちょうど良いという意見が複数得られた (E-c-⑥、F-c-⑦)。他にも狭い道幅の魅力 (A-a-④)、広い道は車が通るため子供たちにとって危険 (D-c-⑦) 等と言った内容も語られている。これらは密集市街地の空間そのものを評価している。

以上のような「集団」で共有されている秩序 (TN や漁村・密集市街地ならではの空間性) は物理的環境が失われても自律的に残っていると言える。これらは3章で見たような「個人」の自地域やその中での価値付け・空間的関与とは異なるレベルでの秩序である。つまり「個人」「集団」の異なるスケールでの住環境づくりが同時に生成されつつある事が認められ、新しいカンボンの再建に向けて有用な示唆が得られたと考えられる。

5. 結

5-1. 得られた知見

本稿では先ず、強制撤去から再建に向かっているジャカルタのカンボン・アクアリウムを経過と現状を文献および観察・ヒアリング調査から整理した (2章)。そして「都市認識」へアプローチするダイアログ手法を導入し、表4に示す12名の居住者「個人」が捉える自地域の姿と成り立ちを明らかにし、その中での価値付けに基づく空間的関与が撤去後に仮設されたシェルターの住環境にも反映され、実現している空間があることを確認した (3章)。さらに、撤去により物理的環境が失われても自律的に残っている「集団」が Tempat Nyaman の存在や、漁村、密集市街地ならではの空間性を共有していることを明らかにした。 (4章)

3章と4章から、「個人」の多様な捉え方と関与の実現を許容しつつ、同時に異なるレベルで「集団」によって自律的に生まれる秩序とその実現が住環境をつくり上げていくというある種の自己組織化が明らかになった。

5-2. 今後の課題

本研究で得られた「個人」による自地域の捉え方や価値付けや「集団」に共有されている秩序が、今後実際の再建計画・住環境づくりにどのように反映されていくのか、「コミュニティ」スケールの意思決定や整備事業との調整も含めて引き続き追いたい。

【謝辞】

本稿は2018年度松下幸之助記念財団 研究助成の調査成果の一部である。また、本ダイアログの実施に当たって、Elisa Sutanudjaja 氏、Amalia nur indah sari 氏、他 Rujak Center for Urban Studies の方々、Jefferson Edmund 氏 (通訳)、大橋茉莉奈氏、そしてカンボンアクアリウムのコミュニティの皆様にも多大なご協力を頂いた。

【補注】

- (1) スクラップ&ビルドによる改良ではなく、改善型の住環境整備手法 (高見沢、1991 など) は定着しているが、近年こうした基盤整備の伴わない内発的・自律的な改善や変化が新たな課題・展開として論じられている (真野、2013)。同時にハードソフトの両面からより丁寧に密集市街地を改変していくマネジメント (窪田ら、2015) (鶴谷、2010) に関する報告も増えており、よりヒューマンスケールで居住者らによる持続的な環境形成プロセス (真野、2013) が注目されている。
- (2) カンボンとは、マレー語で「集落」を意味し、「ムラ」や「田舎」という意味でも使われる (倉沢、2006)。
- (3) ジャカルタで活動する都市・建築事務所 Rujak Center for Urban Studies、本文では Rujak と表記する。

- (4) 例えば岡部らによるカンボン・チキニの研究など (文献4, pp.175-234)
- (5) 自地域とは、居住している地域名や行政区分ではなく、「居住者が自己の延長あるいは自分の場所として捉える時空間的な周辺環境」である。それは必ずしも対話時の物理環境に限定されない為、時間軸も含む (太田、2015)。
- (6) 社会学者のブルーマーは概念とは、本質的にもそのことを感受する為の道具であるといひ、定義的な概念と対置的に「感受概念 (Sensitizing Concept)」と呼んだ。「都市認識」も感受概念である。感受概念はその使用者に、どこを参照するかとか、どのように接近するかというような概括的な意味を与えるものであるという (ブルーマー、1991)。
- (7) 2018年8月に開催された日本人アーティスト北澤潤氏による「夢の家コンテスト」ワークショップである。
- (8) 2018年9月10日～16日で実施され、参加者はK.A.居住者、Rujak のインターン、日本学生等合計20人程であり、居住者が少なくとも1人入った4グループがそれぞれ自分たちで考えたこれからのカンボンの姿を提案した。
- (9) RW (エルウェー、Rukun Warga の略、町内会) と RT (エルテー、Rukun Tangga、隣組) という2層の「コミュニティ」単位がある。RW は複数の RT で構成される。K.A. では RT は2つ、RW はさらに広い範囲となる。
- (10) 共用トイレ兼水浴び場のこと。Mandi (沐浴)、Curi (洗濯)、Kakus (トイレ) の頭文字である。
- (11) ダイアログの基本姿勢は Bohm Dialogue (ボーム、2007) に従い、以下のような流れで行う。居住者毎に①日常会話の延長の状況を作ることを原則とし、「都市認識」へアプローチするよう対話する。②対話内容をスケッチによって外在化し、居住者へ見せて了解を得ながら進める③自地域における価値付けの表現を共にすることが出来、全員が納得した時点で終了。
- (12) 質問項目は以下になる。[0] 生業や家族構成等の基本的質問/[1] いづれから K.A.に住んでいるか/[2] K.A.来住以前はどこに住んでいたか/[3] 強制撤去前の居住場所/[4] 強制撤去後の臨時居住場所/[5] 現在のシェルター内の居住場所/[6] 印象に残っている出来事 (撤去前) / [7] 良かったと思う空間 (撤去前) / [8] 居住者同士で集まっていた様子と場所 (撤去前) / [9] 買い物や生活における移動範囲など (現在) / [10] 価値付けられた自地域はどこか/[11] 家の中で大事なものの、これがあると自分の家だと思うもの/[12] 次の計画への期待や要望。
- (13) 実際ワークショップ (補注7)、国際フィールドスクール (補注8) などで振る舞われた食事もここで作られたそうである。
- (14) 補注7。
- (15) 11月26日の午前10時頃から所要時間は2時間程度であった。最初にダイアログにおけるスケッチと描き込まれた地図を Informant 毎に並べて、簡単に報告をした。そして、その後「集団」において共有されている可能性がある図9の内容をプレゼンテーションし、意見交換をした。

【参考文献】

- 1) 岡部明子 (2011)、「第三の都市生態学 (第二部: 論考(1)<特集>未来のスラム)」, 建築雑誌 1612 号, pp.18-21
- 2) Kampung Aquarium Community & Rujak Center for Urban Studies (2018 年), 「KAMPUNG AKUARIUM PROFILE AND COMMUNITY ACTION PLAN」, Jringan Rakyat Miskin Kota Jakarta
- 3) 倉沢愛子 (2006)、「ジャカルタ路地裏世界」, 『アジア遊学 90 ジャカルタのいまを読む』, pp.31-41, 勉誠出版
- 4) 村松伸編 (2017)、「メガシティ6 高密度化するメガシティ」, 東京大学出版会
- 5) 太田裕通、神吉紀世子 (2015)、「京都・西陣における居住者が抱く『都市認識』を通じた自地域への価値付けを扱う『ダイアログ』手法の開発—都市・建築デザインのための『都市認識』へのアプローチ法の初期的研究」, 公益社団法人日本都市計画学会 都市計画論文集 Vol.50 No.3, pp.1218-1225
- 6) H・ブルーマー (1991)、「シンボリック相互作用論 パースペクティブと方法」, 勁草書房
- 7) K・リンチ (1968)、「都市のイメージ」, 岩波書店
- 8) 大阪大学工学部南太平洋調査班 (1987)、「アジアの都市居住環境の構成—インドネシアを事例に」, 大阪大学創立50周年記念「南太平洋学術調査交流計画」工学部チーム報告書, pp.155-182
- 9) D・ボーム (2007)、「ダイアログ—対立から共生へ、議論から対話へ—」, 英治出版
- 10) 高見沢邦郎 (1991)、「東京区部における改善型地区整備事業の計画と実施過程に関する考察」, 日本建築学会計画系論文報告集 no. 426, pp. 91-100.
- 11) 真野洋介 (2013)、「地方都市密集市街地の新たな展開: 尾道旧市街での取り組みから考える」, 都市住宅学会 都市住宅学(83), pp. 42-45
- 12) 窪田亜矢、田中大朗、池田晃一、森川千裕、李美沙、砂塚大河 (2015)、「漁村から住宅地に変容しつつある浦安において継承すべき住文化: 突発性リスクと進行性リスクに配慮した空間マネジメント」, 住総研研究論文集 42(0), pp. 97-108
- 13) 鶴谷 一貴、赤崎 弘平 (2010)、「密集市街地における路地を活かしたまちづくりの導入に関する研究」, 日本都市計画学会都市計画論文集 45. 3 巻, pp. 1-6